

特集
国際協力の未来
～豊かな国際社会の形成を目指して～

Special Features
The future of international cooperation
Aiming to form an affluent international community

未来を探る
Exploring the future

貧困者のためのメインバンク

～グラミン銀行にみるマイクロクレジットの使命と課題～

浜 矩子

HAMA Noriko

同志社大学大学院/ビジネス研究科/教授



1—貧困者の銀行

上天気の間はいくらでも傘を貸してくれる。だが、いったん雨が降り出せば、たちどころに傘を取り上げる。もういくら頼んでも貸してはくれない。この意地悪は何者か。落語に出て来る因業おやじか。イジメ好きのワルガキか。

さにあらず。正解は「銀行」である。欧米に古くからある言い方だ。銀行相手に、よほど苦勞した人が考え出した格言だろう。こんなものもある。「銀行とは、カネがいらないことを証明出来る人にだけ、カネを貸してくれるところだ」。こっちは、かの名コメディアン、ボブ・ホープが残した言葉だ。彼もまた、銀行相手には涙を飲んだようである。

昔の格言家とボブ・ホープ氏に、グラミン銀行の話をしてあげたら、彼らは何と言うだろう。さだめし驚くに違いない。

世の中で最も貧しい人々を対象に、しかも無担保で超小口の融資を行う。いわゆるマイクロクレジットだ。グラミン銀行は、そういう銀行である。創設者は、学者であり実業家でもあるバングラデシュ人のムハマド・ユヌス氏だ。グラミン銀行とユヌス氏は「脱貧困による世界平和への貢献に多大な成果あり」ということで、2006年にノーベル平和賞を受賞した。

「グラミン」とはベンガル語で「農村」や「農民」のことである。村の銀行だ。貧しい村の貧しい人たちが、事業家として自立を目指すための資金を提供する。小まめに貸して、小まめに返済してもらう。小さく生んで、小さいままでも着実に育つようになるまで、辛抱強くお付き合いする。

2—グラミン銀行の理念

グラミン融資の借り手の上には、毎日毎日、土砂降りの雨が降っている。彼らには、カネが無いことの証明ならいくらでも出来る。銀行たちにとって、これほど敬遠し

たくなる相手はいない。ある意味で、それは当然だ。

雨降りに傘を奪い、借金不要証明付きの人だけにカネを貸すというのは、確かにいかにも意地悪だ。血も涙もない感がある。だが、その血も涙もないところこそ、実をいえば、銀行たるものの社会的責任と節度の要なのである。人様の預貯金を預かる銀行が、むやみやたらと人情に流されて、危ない融資に手を出すことは許されない。そんなことをして銀行そのものの屋台骨が崩れてしまえば、預金者はもとより、他の融資先にも多大な被害が及ぶこととなる。ここが銀行業の難しいところだ。

節度と人情との間で金縛りに合う銀行業。この呪縛を思い切って振り払い、敢えて、最も敬して遠ざけるべき相手に手を差し伸べる。そのグラミン銀行の基本理念は「信用供与を受ける権利は人間の基本的人権だ」ということである。そして、信用供与を行う前提にあるのが、これまた信用である。つまり、貧困者に貸したカネは必ず返済されるという信頼感だ。相手を信じるという意味での信用供与。それが、融資という名の信用供与を行う上でのグラミン銀行の発想の原点なのである。

これらの理念と発想に基づいて、グラミン銀行は1983年に創設された。銀行としてはここが出発点だが、1976年以降の前史がある。この年に、ユヌス氏が大学教授としてバングラデシュの地域経済開発プログラムに取り組み始めた。それをきっかけに、貧困が貧困を呼ぶ悪循環から人々を救出するための融資事業構想が浮上した。地域限定的な試行を積み重ねて行く中で、ついに1983年10月には銀行として、バングラデシュ政府からの特別認可を得るに至ったのである。

3—グラミン銀行の利用者たち

このようにして誕生したグラミン銀行は、2008年3月現

在で749万の人々を融資対象としている。彼らはグラミン銀行の「会員」になっている。グラミン銀行のお得意様クラブだ。会員のうち、概ね9割がいわゆる「現役会員」、つまり、実際にグラミンから継続的に融資を受けている人々だ。グラミンの融資事業はバングラデシュ全土の81,752カ村、村落総数の97%強に及んでいる。

グラミン会員たちのプロフィールには、二つの特徴がある。その一つは、会員総数の96.8%が女性たちだということだ。ユヌス氏曰く「当初、彼女たちは金を借りることを恐れていた。それは本当の恐怖というよりは、歴史によって生み出された想像上の恐怖だった」。この言葉は示唆に富んでいる。「女の分際で借金するなど、とんでもない」。この歴史的・社会的条件付けが女性たちを差別と依存の世界に縛りつけてきた。グラミン融資がその拘束衣から彼女たちを解放したのである。

会員たちのもう一つの特徴は、端的にいって、その極貧振りだ。借り手一人当たりの平均純債務残高は年々、およそ90ドル前後で推移している。週当たりの最低貸し出し額が3ドルを超えれば、そのような借り手はもう貧困から脱却したとみなされる。確かに、世界銀行によれば、一日当たりの生活費1ドルが極貧者の定義であるから、毎週3ドルの借金をする甲斐性が出て来れば、生活実態はかなり改善されたと考えるべきところだろう。

他方、グラミン会員の中にはその名も「物乞い会員」たちがいる。会員総数のおよそ1%である。読んで字のごとし。物乞いをするしか、生きていく術がない。彼らがグラミン会員となるために、物乞いを止める必要はない。いつものように道行く人々の施しを受けながら、グラミン銀行から無利子融資を受けることが出来る。それを気長に週当たり3セント程度のペースで返済して行く。これぞまさしく、究極のマイクロクレジットだ。極貧者のための極小融資である。

4—グラミン銀行の運営体制

グラミン銀行の融資原資は基本的に預貯金である。銀行だから、これは当たり前だ。そう言ってしまえばそれだけのことだ。だが、注目すべきは預金者構成である。グラミン銀行の預金者のうち、5割強は会員預金者なのである。要は、融資先の多くが同時に預金者でもあるということだ。活動資金を貸し付けると同時に、貯蓄増強も促すというやり方だ。なお、非会員預金者にはグラミン銀行の従業員と非会員地元民たちが名を連ねている。グラミン融資の直接的な対象者のみならず、幅広くバングラデシュ全土の村民たちを資産形成の方向に誘導していこうという発想である。

こうして預金基盤を拡充していく中で、2004年を境にグラミン銀行の預金残高が貸し出し残高を上回る関係になった。いわゆる預貸率でみれば、2008年3月現在の数字が73.2%である。外部資金に依存することなく、グラミン銀行としての預金吸収の中でマイクロクレジットを実行しているわけだ。しかも、その預金の5割が会員すなわち融資先から受け入れたものなのであるから、これはなかなか効率的なビジネスである。さしづめ、循環型ファイナンスというべきところだ。

グラミン銀行のウェブサイトをみても、「我々はもはや新たな寄付金も借り

入れも必要としない。どんどん増える預金量の中で、融資計画の拡大も既存借入金の返済も充分に賄うことが出来る」と誠に意気軒昂だ。年次報告をみる

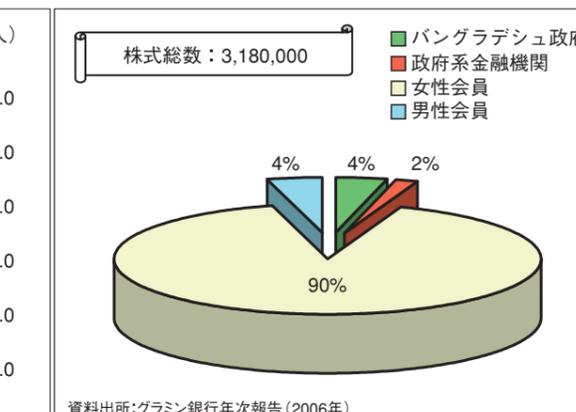
■表1—グラミン銀行の概況(2008年3月現在)

累積融資実行額	690,060万ドル
融資回収率	98.2%
会員数	7,463,566人
女性	7,228,497人
男性	235,069人
預金残高	76,480万ドル
会員	42,920万ドル
非会員	33,560万ドル
対象村落数	81,574
預貸率	73.2%

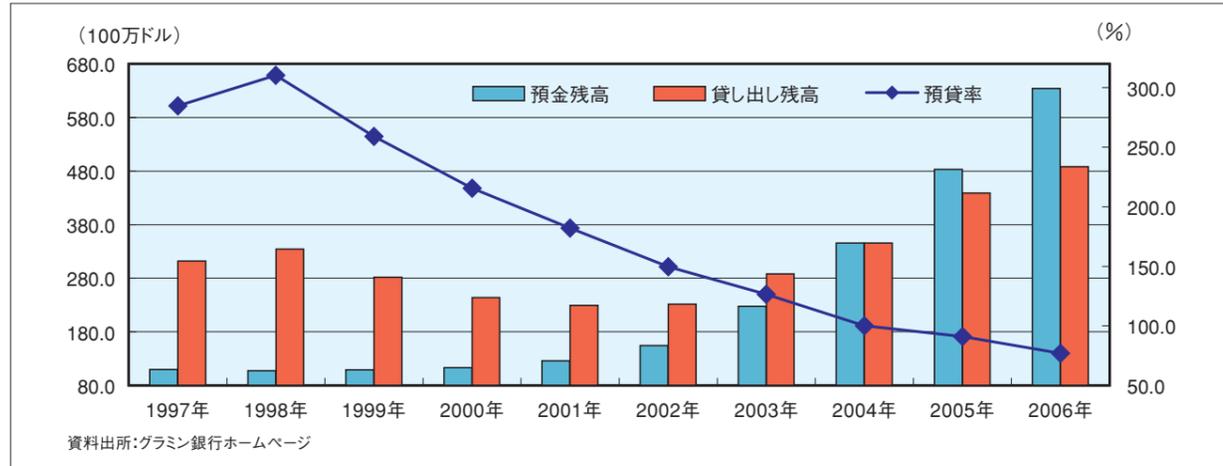
資料出所:グラミン銀行ホームページ



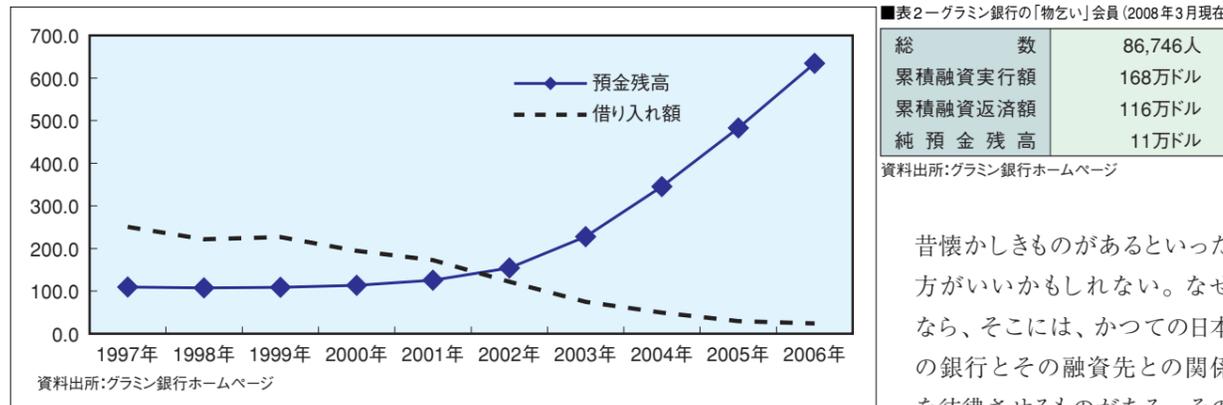
■図1—グラミン銀行10年間の融資実績と会員数の推移



■図2—グラミン銀行の株主構成(2006年)



■図3ーグラミン銀行の預貸率の推移



■図4ーグラミン銀行の預金残高と借入れ額の推移

と、必ずしも海外銀行や財団からの資金受け入れが全くゼロになっているわけではないようだが、継続的に新規の外部資金を受け入れる必要が無くなったという趣旨だろう。

かくして、グラミン融資の対象者たちは同時にグラミン銀行の貴重な預金者たちでもあるわけだが、実はそればかりではない。彼らは、グラミン銀行の大株主でもある。会員たちの持ち株比率は実に94%に達している。残りの6%はバングラデシュ政府および政府系金融機関の出資分である。マイクロクレジット機関であるから、もとより、資金規模そのものが小さいわけだが、それにしても、極貧層を含む零細村民たちがグラミン銀行をまさに「おらが銀行」と呼べる株主構成には、マイクロクレジット機関としての面目躍如たるところがあるといってい

5——日本のメインバンク制度との相似

ところで、グラミン銀行の実態をみてくると、面白いことに気がつく。融資先が預金者でもあり、株主でもある。この関係には、どこか見慣れたものがある。あるいは、

制度というよりは、慣行といった方がいいだろう。日本の諸企業とその主力銀行との間で陰に陽に成り立って来た関係である。その一環として、預金に関する「歩積み・両建て」があり、株式に関する「持ち合い」があった。

歩積み・両建てとは、要するに債務者が借入れ先の銀行に積む預金を意味する。要は一種の担保である。担保的な性格のものであるため、事実上、引き出すことが出来ない預金だ。そのため、これを拘束性預金ともいう。金融がグローバル競争の時代を迎え、「貯蓄から投資へ」の呼び声が高まる中で、次第に昔物語の様相を呈しつつある慣行だが、その有り方を巡って議論百出する時代もあった。

グラミン銀行の場合、会員たちからの預金を担保代わり扱いしているわけではない。だが、預金口座の開設はグラミン融資を受けるための条件である。開設すべき口座が三種類ある。個人貯蓄口座、特別貯蓄口座、そして年金預金口座である。年金口座は比較的借入れ額が大きい借手用のものだ。

借手は、融資実行時に借入れ額の5%を預金しなければならない。そのうち、半額は個人口座へ、他の半

■表2ーグラミン銀行の「物乞い」会員 (2008年3月現在)

総数	86,746人
累積融資実行額	168万ドル
累積融資返済額	116万ドル
純預金残高	11万ドル

資料出所:グラミン銀行ホームページ

昔懐かしきものがあるといった方がいいかもしれない。なぜなら、そこには、かつての日本の銀行とその融資先との関係を彷彿させるものがある。その名を「メインバンク制度」という。

■表3ーマイクロクレジット関係者がみたリスク要因の急迫度ランキング

順位	全回答者	実施当事者
1	競争激化	競争激化
2	人材問題	ミッション・ドリフト
3	政治介入	貸し倒れ懸念
4	資金過剰	政治介入
5	貸し倒れ懸念	人材問題
6	戦略立案難	戦略立案難
7	ミッション・ドリフト	技術管理
8	所有権問題	所有権問題
9	金利設定	金利設定
10	期待過剰	経営者の質

注)74カ国300人強のマイクロクレジット関係者に当面のリスク要因について急迫度の順位づけを聴取した結果。「実施担当者」は実際にマイクロクレジットを行っている融資スタッフ。全回答者にはこの他に金融アナリスト・投資家・その他の専門家が含まれる。

額は特別貯蓄口座に預金する。個人口座からの引き出しは自由だが、特別貯蓄口座については、最初の3年間は引き出しが出来ない。その後も、一定額の残高を口座に残しておくことが義務づけられる。ここまで来ると、明示的な担保性はないというものの、かなり拘束性預金の色彩が強くなる。

もう一方の株式持ち合いについて言えば、グラミン銀行とその融資先で相互に株式を持ち合っているというわけではない。だが、融資先がグラミン銀行株を持つことによって形成される一連托生の関係には、やはり、日本のメインバンクたちとその融資先との関係を想起させるものがある。

メインバンクは、いざという時には実に頼りになる存在だ。だが、そうあるためには、日頃は口うるさくて、監視も厳しい。貧しき村民債務者たちと、彼らのためのメインバンクであるグラミン銀行との間にも、実はこれと同じ関係があると言えそうだ。その限りでは、グラミン銀行もあまり普通の銀行と変わらない。むしろ、コミットメントの深さという意味では、一般的な銀行ー融資先関係よりも大きく踏み込んだ「注意義務者」として借手たちの動静を注視している。極めてメインバンク的である。

弱者に対する無担保融資。一見すれば、金融業の常識を全く度外視したやり方だ。だが、その背後には、一皮めくれば、かつての日本のメインバンクなみのスタンスも見える。手堅い債権者としての防備の姿勢だ。

ここはなかなか重要なところだ。この防備の固さや銀行としての健全性あるいは収益性追求が完全に前面に出てしまえば、グラミン銀行もただの金融機関だ。なんのための準拘束性預金なのか。誰のための融資先株主主義なのか。それを見失うことへの注意が必要だ。反面、あまりにも融資先本位に成り過ぎれば、マイクロクレジット機関としての存続性が危うくなる。

この微妙な綱引きの中で、絶妙なポジションを取る才

覚と心意気。結局のところは、ここがマイクロクレジットの成否を分ける。そういうことなのだと思う。

6——マイクロクレジットの未来

グラミン銀行をはじめ、マイクロクレジットあるいはより広義のマイクロファイナンス全体に対しても、世間の批判は少なくない。

触れ込みほどの貧困救済効果はない。グローバル経済を覆う貧困問題の巨大さに比べれば、所詮、焼け石に水だ。そんな言い方が聞こえて来る。それはそれとして、厳粛に受け止める必要があるだろう。

だが、より注意を要するのが、前述の綱引きの中でバランスを失い、マイクロクレジットが本末転倒に陥る危険性だろう。この問題を「ミッション・ドリフト」と言う。ミッションは本来の使命、ドリフトは遊離して遠ざかるという意味合いだ。1990年代末には、グラミン銀行がこの問題に直面させられた。大洪水という天災や、女性債務者の夫たちによるボイコット運動のお陰で、融資回収率が大きく落ち込んだのである。それを立て直そうとする中で、グラミン銀行は本来のミッションを見失って債権回収に奔走する普通の銀行と化しかけた。今日のグラミン銀行の体制と仕組みの多くは、その時の反省に基づく改革の成果だ。

グラミン銀行の場合は、マイクロクレジットが行き詰まりの危機に瀕する中でミッション・ドリフトが起こった。これに対して、最近では、むしろ、マイクロクレジットあるいはマイクロファイナンスがあまりにも社会的に評価され、収益性にも多大な期待が寄せられる中で、ミッション・ドリフトが起きつつある。グローバル金融の激しい競争の中で、世界の金融機関たちは常に新しい金融商品づくりに奔走している。投資家たちは常に画期的な投資機会を追い求めている。社会的責任投資という言葉も大いにはやる昨今だ。

こうした中で、マイクロクレジットは次第に金融界におけるスター的地位を占めつつある。セレブ化したマイクロクレジットに対して、本来はそのミッションの中で主要な位置を占めるはずではない投資効率とか収益性とか、進取性などが要求されるようになってきているのである。マイクロクレジットがファンド資本主義の餌食になってもいいのか？ そんなテーマで物を考えなければならぬ時が来るかもしれない。ここに、金融を通じた貧困救済の次の課題がありそうだ。土砂降りの中で傘を差し出す救世主。この「ミッション」からマイクロクレジットが「ドリフト」してしまっ